

令和 6 年 6 月 8 日現在

機関番号：13701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K03044

研究課題名（和文）潜在的なトラウマ体験を持つ親に対するTICを応用した支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of a support program applying TIC to parents with potential traumatic experiences

研究代表者

板倉 憲政（Norimasa, Itakura）

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：20708383

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、親の小児期逆境体験（ACEs）が、養育スタイルやメンタライゼーションやソーシャルサポート（SS）を媒介して、子どもの問題行動に与える影響過程について検討した。さらに、ACEsが、ペアレントトレーニング（PT）の効果に与える影響について検討した。本研究の結果、ACEsは、子どもに「叱責」を行いやすく、「育てにくさ」を感じやすくなることが示された。また、親自身の気持ちに気づきにくく、SSを得られにくいことが示唆された。さらに、ACE高群の保護者は、PTの効果が表れにくいことが示された。以上のことから、行動変容が困難な親に対して、親のトラウマに配慮した支援の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の関係性に焦点をあてた家族療法やペアレントトレーニングは、保護者が有するトラウマの影響を重視していない。これらの既存のアプローチにトラウマインフォームドケアの視点を取り入れることは、親の抱える子育ての問題だけでなく、親自身のケアや自身の過去の体験の整理につながる可能性がある。今後、ACEsのある親への支援を充実させることが、子どものACEsを軽減させる上では必要になる。潜在的なトラウマを抱えた保護者の支援を目指す本研究は、子育て支援に関する研究領域において極めて先駆的な取り組みとして位置づけられる。本研究成果は、子育て支援の幅を広げ、児童虐待の予防に大きく貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：The present study examined the influence process of parental ACEs on children's problem behaviors through the mediation of parenting style, mentoring, and social support. In addition, the influence of parents' ACEs on the effectiveness of parent training was examined. The results of this study indicated that parental ACEs were more likely to "reprimand" their children and to feel "difficulty in raising" them. It was also suggested that parents were less likely to be aware of their own feelings and less likely to obtain social support. Furthermore, parents in the high ACEs group were less likely to show the effects of parent training than parents in the low ACEs group. These findings suggest the need for support that takes parental trauma into consideration when supporting parents who have difficulty changing their behavior.

研究分野：臨床心理学

キーワード：小児期逆境体験 ト라우マインフォームドケア 子育て支援

1. 研究開始当初の背景

わが国の児童虐待対応件数は年々増加し続けている。虐待やマルトリートメントは、子どもにとってトラウマや小児期逆境的体験 (ACEs) となり、健全な発達を阻害することが明らかにされている (Felitti, et al., 1998)。そのため、児童虐待予防支援は急務の課題であり、申請者らはこれまで子どもの問題行動を訴える親に対して、子どもへの関わり方へ介入し、問題の解消を図ってきた。しかしながら、介入を行っても親の行動変容が困難なケースが一定数存在する。このような親の行動変容の困難さの一要因として、親自身が持っている ACEs が挙げられる。ACEs の多い母親は、社会経済的地位をコントロールした上でも育児ストレスが高く (Steele et al., 2016)、ACEs が増えるほど子どもの育てにくさや育児への苦痛が増加することが示されている (Lange, Callinan, & Smith, 2019)。また、ACEs の高い親においては、子どもを叩くこと (Chung et al., 2009)、揺さぶりや食事を抜く、しかりつけることを育児として受け入れる態度が見られている (Clemens et al., 2020)。こうした攻撃や拒絶、身体的しつけといった否定的な養育行動による子どもの問題行動への媒介効果も指摘されている (Hanetz-Gamliel & Dollberg, 2022; Luo et al., 2023; Yoon et al., 2019)。つまり、ACEs の累積は否定的養育を増幅させ、子どもに影響を与えていることがわかる。

したがって ACEs が累積している親への子育て支援を行うことは、親の育児困難感やストレスを軽減し、次世代の心理的問題を防ぐために非常に重要となる。しかし、ACEs の多い親がサポートを適切に得ることができるかについては十分な検討は行われていない。また、親の ACEs が子どもに与える影響に関する研究は欧米を中心に行われており、日本人の親子に関する知見は見られない。以上のことから、親の持つ ACEs が、子育てにどのように影響するのかについて明らかにしていくことが求められる。さらには、親の持つ ACEs が、育児に関連するサポートを受ける機能やメンタライゼーション機能にどう影響し、子どもの問題に関連してくるのかについて検証する必要がある。また、実際に親の持つ ACEs が子育てにおける行動変容を困難にしているのについては明らかにされていない。そのため、親の持つ ACEs がペアレントトレーニングの効果の阻害要因となるのかについては検討の余地が残る。

2. 研究の目的

以上より本研究では、親の持つ ACEs に焦点を当てて、以下について検討する。まず、研究 1 では、養育スタイルを調整変数として、親の持つ ACEs が養育スタイルを介して子どもの問題行動の形成に与える影響過程について検討する。次に、研究 2 では、親のメンタライゼーション (MT) とソーシャル・サポート (SS) を調整変数として、親の持つ ACEs がそれらを介して子どもの問題行動に与える影響について明らかにする。最後に、研究 3 では、親の持つ ACEs がペアレントトレーニングの効果 (保護者の養育スタイルや子どもの問題行動) に与える影響について検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究 1

1) 調査協力者と実施手続き

インターネット調査会社を通して、2~4 歳の子どもを持つ母親約 1000 名を対象にインターネットによる質問紙調査を実施した。アンケートの回答にかかる所要時間は 20 分程度で、調査時期は 2022 年 2 月であった。

2) 質問紙の構成

- ①基礎情報：回答者の年齢、配偶者の有無、子どもの年齢、子どもの性別、子どもの出生順位、子どもの数を尋ねた。
- ②逆境的小児期体験 (ACE; Nakazawa, 2015)：心理・身体・性的虐待・ネグレクト、親の離婚や精神疾患等に関する計 10 項目からなる尺度を使用した。
- ③養育スタイル尺度 (松岡ら, 2011)：「肯定的働きかけ」「相談・つきそい」「叱責」「育てにくさ」「対応の難しさ」の 5 因子、27 項目からなる尺度を使用した。
- ④子どもの強さと困難さアンケート (SDQ; 飯田ら, 2014)：「情緒の問題」「行為の問題」「多動/不注意」「仲間関係の問題」「向社会的な行動」の 5 因子、25 項目からなる尺度を使用した。

(2) 研究 2

1) 調査協力者と実施手続き

インターネット調査会社を通して、2~4 歳の子どもを持つ母親約 1000 名を対象にインターネットによる質問紙調査を実施した。アンケートの回答にかかる所要時間は 20 分程度で、調査時期は 2022 年 2 月であった。

2) 質問紙の構成

- ①基礎情報：回答者の年齢、配偶者の有無、子どもの年齢、子どもの性別、子どもの出生順位、子どもの数を尋ねた。

- ② 逆境的小児期体験 (ACE; Nakazawa, 2015) : 心理・身体・性的虐待・ネグレクト, 親の離婚や精神疾患等に関する計 10 項目からなる尺度を使用した。
- ③ 日本語版 The Mentalization Scale (MT; 松葉ら, 2019) : 「他者へのメンタライジング」, 「メンタライゼーションへの関心」, 「自己に対するメンタライジング」の 3 因子, 22 項目からなる。
- ④ ソーシャル・サポート尺度短縮版 (SS; 岩佐ら, 2007) 「家族のサポート」, 「大切な人のサポート」, 「友人のサポート」を踏まえた 7 項目からなる尺度を使用した。
- ⑤ 子どもの強さと困難さアンケート (SDQ; 飯田ら, 2014) : 「情緒の問題」, 「行為の問題」, 「多動/不注意」, 「仲間関係の問題」, 「向社会的な行動」の 5 因子, 25 項目からなる尺度を使用した。

(3) 研究 3

1) 研究協力者と実施手続き

岐阜県内の A 施設にて開催されたペアレントトレーニング (幼児期コース, 学童期基礎コース, 学童期応用コース) に全てのプログラムに参加した 4 歳から 13 歳の子どもの持つ母親・父親計 22 名 (平均年齢 : 42.17 歳) を対象とした。調査は 2023 年 5 月~7 月の間, 9 月~11 月の間に実施された。

2) 質問紙の構成

- ① 基礎情報 : 回答者の年齢, 配偶者の有無, 年収, 子どもの年齢, 子どもの性別, 子どもの診断の有無, 子どもの出生順位, 子どもの数を尋ねた。
- ② 逆境的小児期体験 質問票改訂版 (カリフォルニア外科医臨床諮問委員会, 2020) : 心理・身体・性的虐待・ネグレクト, 親の離婚や精神疾患等に関する計 10 項目を最終回に回答を得た。
- ③ 子どもの強さと困難さアンケート (SDQ; 飯田ら, 2014) : 「情緒の問題」「行為の問題」「多動・不注意」「仲間関係の問題」「向社会的な行動」の 5 因子, 25 項目を月に 1 回, 計 3 回実施した。
- ④ 養育スタイル尺度 (松岡ら, 2011) : 「肯定的働きかけ」「相談・つきそい」「叱責」「育てにくさ」「対応の難しさ」の 5 因子, 27 項目を月に 1 回, 計 3 回実施した。

4. 研究成果

(1) 保護者の ACEs が子どもの問題行動に及ぼす影響—養育スタイルを調整変数として—

研究 1 では, ACE 合計得点, 養育スタイル尺度の下位尺度因子, SDQ の下位尺度因子との間の Pearson の相関係数を算出した。その結果, ACE と養育スタイルの「相談・つきそい」「叱責」「育てにくさ」, SDQ すべての因子との相関が見られた。また, 養育スタイルと SDQ との間にはすべての因子間に相関がみられた。さらに, ACE 合計得点が, 養育スタイルの下位尺度因子を介して SDQ の下位尺度因子を説明しているモデルを想定し, 相関分析の結果を踏まえてパス解析を行った。5%水準で有意であるパスを残し, 養育スタイル尺度の下位尺度因子及び SDQ の下位尺度因子の誤差間の共分散を仮定してパス解析を行った。その結果, 最終的に Figure1 のモデルが得られた。モデルの適合度は, $\chi^2(9)=62.29(p<.0001)$, GFI=.99, AGFI=.93, CFI=.98, RMSEA=.08 であった。研究 1 の成果から, 親の ACEs は, 子どもに対して「相談・つきそい」を困難にさせ, 「育てにくさ」や「対応の難しさ」を感じやすくする可能性が示唆された。さらには, それらの養育スタイルが, 子どもの問題行動に影響を与えることが明らかにされた。

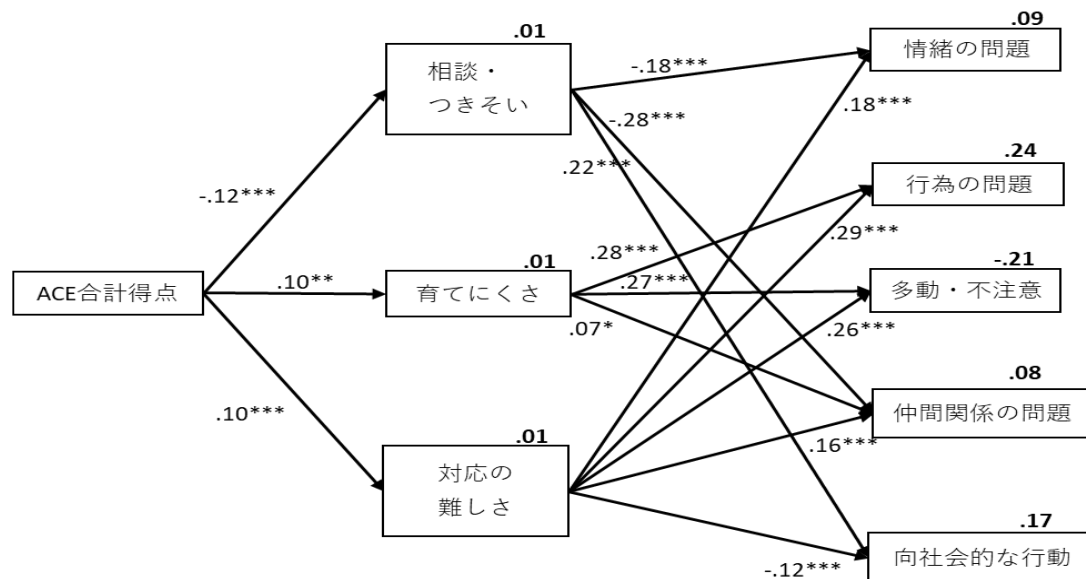


Figure1 ACE 得点が子どもの問題行動に至るパス図

注 : 数値は標準化推定値と, 長方形右上の数値は決定係数を示す。なお, 誤差変数間の共分散は省略している。

*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$

(2) 保護者の ACEs が子どもの問題行動に及ぼす影響—MT と SS を調整変数として—

研究 2 では、ACE 合計得点、MT 尺度の下位尺度因子、SS 尺度、SDQ の下位尺度因子との間の Pearson の相関係数を算出した。その結果、ACE と MT 尺度のうちの「自己に対するメンタライジング」との間、ACE と SS との間にそれぞれ弱い負の相関がみられた。さらに、MT、SS と SDQ との間には多くの因子間に相関がみられた。また、ACE 合計得点が、MT の下位尺度因子と SS を介して SDQ の下位尺度因子を説明しているモデルを想定し、相関分析の結果を踏まえてパス解析を行った。5%水準で有意であるパスを残し、MT 尺度の下位尺度因子と SS 尺度及び SDQ の下位尺度因子の誤差間の共分散を仮定してパス解析を行った。その結果、最終的に Figure2 のモデルが得られた。モデルの適合度は、 $\chi^2(6)=42.95(p<.0001)$, GFI=.99, AGFI=.94, CFI=.97, RMSEA=.08 であった。研究 2 の成果から、親の ACEs は、自己に対する MT や SS を阻害する可能性があり、子どもの問題行動に繋がってしまうことが示唆された。

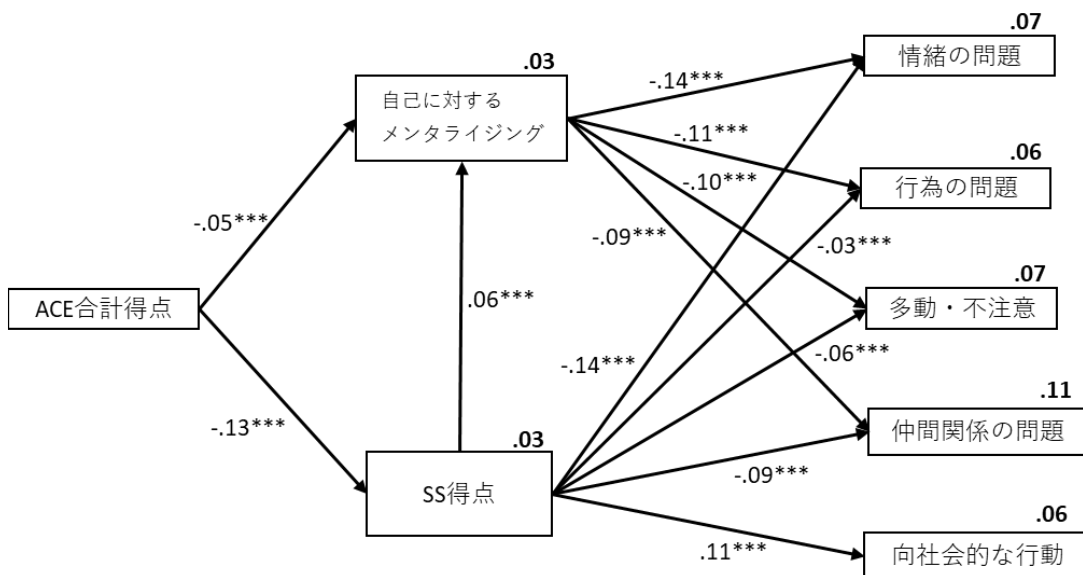


Figure2 ACE 得点が子どもの問題行動に至るパス図

注：数値は標準化推定値と、長方形右上の数値は決定係数を示す。なお、誤差変数間の共分散は省略している。

*** $P<.001$, ** $P<.01$, * $P<.05$

(3) 保護者の ACEs がペアレントトレーニングの効果に与える影響

研究 3 では、保護者の ACE の平均値を基に、ACE 高群 (2 点以上) と低群 (1 点以下) の保護者に分類し、両者の間にペアレントトレーニングの効果に違いが見られるのかについて検討した。その結果、ACE 高群の保護者は、低群の保護者と比較して、子どもへの「肯定的働きかけ」が少なくなり、子どもへの「相談・つきそいが」がスムーズに行えない可能性が明らかにされた。また、ACE 高群の保護者は、低群の保護者と比較して、ペアレントトレーニングを実施しても子どもに「叱責」を行いやすいことが示唆された。さらに、ACE 高群の保護者は、低群の保護者と比較して、ペアレントトレーニングを実施しても子どもの「対応の難しさ」が減少しにくい可能性が示唆された。

(4) 潜在トラウマ体験を持つ親への支援体制の提案

研究 1~研究 3 を通して、親の持つ ACEs は、子どもへの「相談・つきそい」を困難にさせ、「育てにくさ」や「対応の難しさ」を感じやすくなる可能性が明らかにされた。また、親の持つ ACEs は、自身の気持ちに気づきにくく、SS を得られにくいなどの影響を与えることが示唆された。さらに、そのような影響が間接的に子どもの問題行動を悪化させる可能性があることを見出した。実際、ACE 高群の保護者は、低群の保護者と比較して、ペアレントトレーニング効果が見出されにくい可能性が示された。これらのことから子育てに困難を抱えている母親に対して、母親の成育歴を踏まえた上で、トラウマに配慮した支援の必要性が示唆された。

しかし、実際の臨床現場では、親の多くは自身のトラウマの影響は潜在化しているため、子どもの問題行動を主訴として親は相談に訪れる。また、従来の子育て支援として用いられる家族療法やペアレントトレーニングでは親のトラウマを想定していない。それゆえ、行動変容が困難な親に対しても行動変容を促す介入をし続ける。これにより失敗経験が積み重なり、再トラウマ体験として親を傷つけるリスクがある。よって、子どもに対する親の行動変容が困難な場合には親

の過去のトラウマを想定した支援に切り替える必要がある。

そのため潜在的なトラウマを支援者と親との間で理解し、共有する支援の枠組みが求められることから、トラウマインフォームド・ケア（以下：TIC）を応用することが必要不可欠である。TICとは、見えないトラウマを「見える化」するケアであり、トラウマを理解し、認識し、対応し、再トラウマ化を防ぐ実践である（亀岡, 2019; 野坂, 2019）。支援初期の心理教育では、「親失格ではなくトラウマ症状である」ことや「過去の養育体験によって生じた当然の反応である」と伝える。これによって、親の自責感を軽減し、支援への動機付けを高め、自身で自分をコントロールすることを促していく。「自分は親として失格」と思い込んでいる親に、「ここがケガをしていたからうまく子どもに関われないだけ。過去に起きたことは変えられないけど、これからの生活を変えていくことができる」とパラダイムの転換を図る。たとえば、子どもが困った様子でいると回避してしまう、怒鳴り声をあげてしまう、子どもの泣き声に圧倒されてしまう反応が見られる場合、親の過去のトラウマ体験を想定した支援に切り替える必要がある。つまりそれらの反応は、過去の体験の影響であることを心理教育していくことが求められる。

ペアレントトレーニングや家族療法等の既存のアプローチに TIC を取り入れることは、親の抱える子育ての問題だけでなく、親自身のケアや自身の過去の体験の整理につながる可能性があるのではないだろうか。今後、ACEs 歴のある親への支援を充実させることが、子どもの ACEs を軽減させる上では必要になる。

5. 主な著書および発表論文等（研究代表者、研究分担者には下線）

- 1) 狐塚貴博・板倉憲政・森川夏乃. (2021). 災害支援 森田美弥子・松本真理子・金井篤子（監）・窪田由紀（編）危機への心理的支援 ナカニシヤ出版, 61-72.
- 2) 板倉憲政・兪 幃蘭・酒井春佳・荻野敬子・井口宣子. (2021). 日本における家族療法の 30 年 若島孔文・野口修司（編）テキスト家族心理学 金剛出版, 221-245.
- 3) 板倉憲政. (2021). トラウマインフォームドケアの理論と実践 ―子どもの生活支援に焦点を当てて― 発達精神医学研究所紀要 6, 44-53.
- 4) 板倉憲政. (2023). 小児期逆境体験に関する概観 ―親の ACEs が子育てに与える影響に焦点を当てて― 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 71(2), 115-123.
- 5) 高山桃香・板倉憲政. (2023). ペアレントトレーニングの効果に影響を与える阻害要因について 岐阜大学教育学部研究報告人文科学, 72(1), 175-182.
- 6) 大津菜里・板倉憲政. (2024). 皮膚感覚と感覚処理感受性が不安感や対人認知に与える影響 臨床心理学 24, 103-111.

6. 主な学会論文等（研究代表者、研究分担者には下線）

- 1) 田所撰寿（司会）・益子洋人（話題提供）・板倉憲政（話題提供）・三好真（話題提供）・日野宜千（指定討論）・沢宮容子（指定討論）. (2021). 大会準備委員会主催シンポジウム 1 新しいカウンセリングの方向 ―カウンセラーは現代社会にどう働きかけることができるのか― 日本カウンセリング学会第 53 回大会.
- 2) 森川夏乃・板倉憲政・狐塚貴博. (2022). 保護者の逆境的小児期体験が子どもの問題行動に及ぼす影響 ―養育スタイルを媒介として― 日本心理臨床学会第 41 回大会.
- 3) 板倉憲政・森川夏乃・狐塚貴博. (2022). 保護者の逆境的小児期体験が子どもの問題行動に及ぼす影響 ―メンタライゼーションとソーシャルサポートを調整変数として― 日本心理学会第 86 回大会.
- 4) 木村悠人・板倉憲政. (2023). Posttraumatic Growth を促進する介入の効果に関する研究 ―転換的語り直しを用いて― 日本ストレスマネジメント学会第 21 回大会.
- 5) 板倉憲政. (2023). 親子のこころのケアと関係構築支援を考える 第 66 回全国母子生活支援施設研究大会（招待講演）.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 板倉憲政	4. 巻 6
2. 論文標題 トラウマインフォームドケアの理論と実践 - 子どもの生活支援に焦点を当てて -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達精神医学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 板倉憲政	4. 巻 71
2. 論文標題 小児期逆境体験に関する概観 親のACEsが子育てに与える影響に焦点を当てて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告人文科学	6. 最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高山桃香・板倉憲政	4. 巻 72
2. 論文標題 阻害要因について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岐阜大学教育学部研究報告人文科学	6. 最初と最後の頁 175-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大津栞里・板倉憲政	4. 巻 24
2. 論文標題 皮膚感覚と感覚処理感受性が不安感や対人認知に与える影響	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 103-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 板倉憲政
2. 発表標題 大会準備委員会主催シンポジウム 1 新しいカウンセリングの方向 カウンセラーは現代社会にどう働きかけることができるのか 保護者の逆境的小児期体験が子どもの問題行動に及ぼす影響 - メンタライゼーションとソーシャルサポートを調整変数として -
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第53回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 板倉憲政・森川夏乃・狐塚貴博
2. 発表標題 保護者の逆境的小児期体験が子どもの問題行動に及ぼす影響 - メンタライゼーションとソーシャルサポートを調整変数として -
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森川夏乃・板倉憲政・狐塚貴博
2. 発表標題 保護者の逆境的小児期体験が子どもの問題行動に及ぼす影響 - 養育スタイルを媒介として -
3. 学会等名 日本心理臨床学会第41回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木村悠人・板倉憲政
2. 発表標題 Posttraumatic Growthを促進する介入の効果に関する研究 転換的語り直しを用いて
3. 学会等名 日本ストレスマネジメント学会第21回大会.
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 板倉憲政
2. 発表標題 親子のこころのケアと関係構築支援を考える
3. 学会等名 第66回全国母子生活支援施設研究大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 狐塚貴博・板倉憲政・森川夏乃	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 9
3. 書名 森田美弥子・松本真理子・金井篤子（監）・窪田由紀（編） 危機への心理的支援（担当部分：災害支援）	

1. 著者名 板倉憲政・兪幜蘭・酒井春佳・荻野敬子・井口宣子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 24
3. 書名 若島孔文・野口修司（編）テキスト家族心理学（担当部分：日本における家族療法の30年）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	狐塚 貴博 (KOZUKA TAKAHIRO) (00739526)	名古屋大学・教育発達科学研究科・教授 (13901)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森川 夏乃 (MORIKAWA NATSUNO) (70757252)	愛知県立大学・教育福祉学部・准教授 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関